

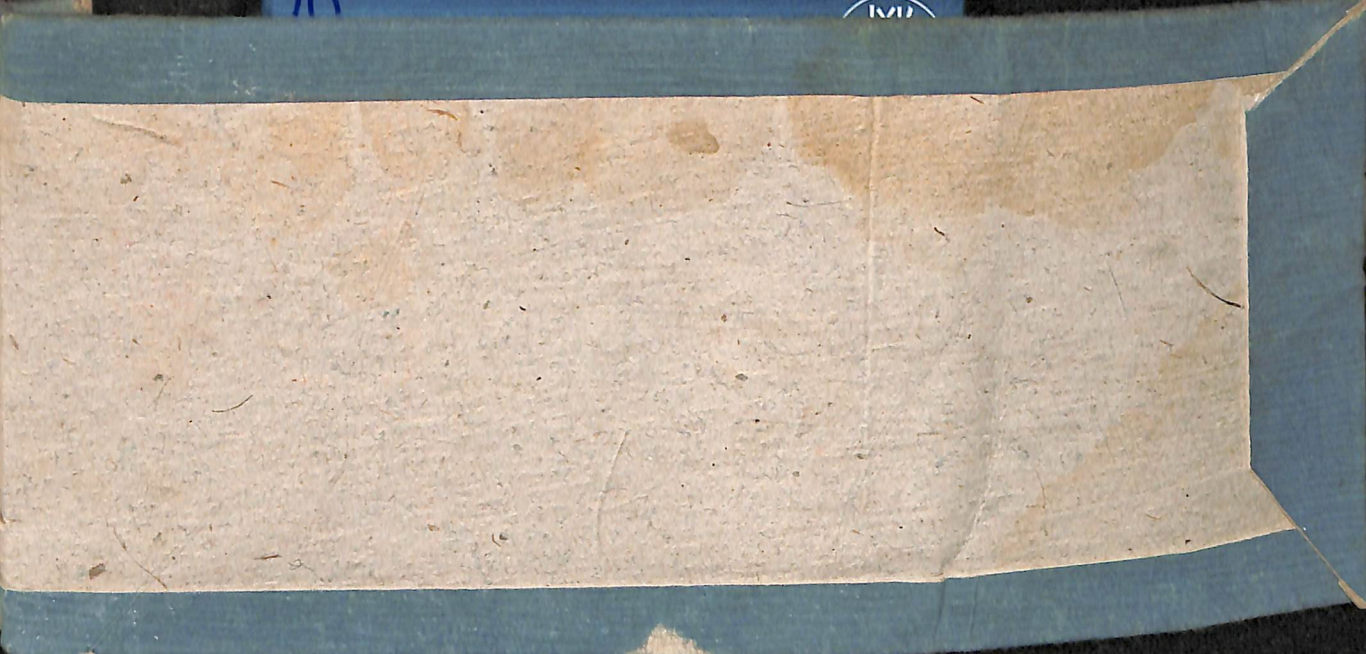
911.3

18

911.3

18





俳諧袖珍抄文部

古語金然池輯

梅芭蕉癖

菊々東籬上さるえ竹ハ小窓
の君とわら牡丹を紅白れ是花
ありて春をよけさる梅地ホハ
事也よこはみきささるされハ
花咲はつもの事ハや拙ハ
境ハさつ十時芭蕉一ハと成
桂風去さ意のころハやかあひ
きんぬ株茎とさあそその葉
茂りころあかりて花をさそし先
草堂ハ折湯もかくしとさつりて
人呼てる花の名とす明友ハ
人ともたおして花をささる梅を
ささるてささるハれくささる
ささるハれんあひぬひとささる
れくハれんあひぬひとささる
既ハ破れんとすれハれハれハ
の梅ハ地をささるハれハれハ



あそびとて一正月の初め原切
しつものを惜むさうれは原
しひん子鹿をたふして狩り
東渡とあすきゑ、雲霞とあみ
風雅とあすき予くろみり
やうり強ハ何のおまゝのむや
風雅のおまゝととり風雅ハ
何のおまゝや画のおまゝと
とり其すふふと二うて用と
あすきと一なりやまもや君子を
ふ能と能とこれにふてうて
用つふと感すふよや繪を
取て予うふと風雅はとて
し予うふふとあすきふとも
ふう画を精非図に入筆端め
とゆふ其ふをさふや予う
ふふふふと予う風雅を
文藝をふれとてふふふ
ひて用ふふと只歌阿西
の詞のふかりを先といひち

送許大幹

さね あつたふたすけはな
 られあふむかひに後をねとるま
 ちぢきひの物もさういふ歌は
 とありてふくまふわらひよそ
 とのこまりゆかにしめやせむ
 清も深もあらぬをこそ
 おどろともあらぬにあらん
 ふれね古人の心ともめえ
 古人のもゝ死するおともえ
 よし南山たけの草のこゝもえ
 えさう風舞も又これはおあへ
 ひいてふくまふわらひよそ
 のおと送つてふくまふのぞ

木下路より西甲へゆへ人
東川へゆへといふ者より風輕
し情ほへ人いづしるゝ後より
けり難し何しといふ人なれ
坐よりをむをいといひておのれの

心とせめて物の実とせむとて
ろくろく今世はおやけのあま
剣を擡ぎてさみまうけのいし
う換とせむとせむとて
ろくろく今世はおやけのあま
うしつとせむとせむとて
うしつとせむとせむとて

枝の葉のこころも
くきんは旅もあはれまうけの
けあはれまうけの
やうとせむとせむとて
うしつとせむとせむとて

送僧專吟詩

杖臥より鞋をうけてまうけ
うしつとせむとせむとて
河川の子鹿をひいて
うしつとせむとせむとて
風聲をうしつとせむとて

斗數の柳のまうけ
けあはれまうけの
うしつとせむとせむとて
うしつとせむとせむとて
うしつとせむとせむとて
うしつとせむとせむとて
うしつとせむとせむとて
うしつとせむとせむとて

[illegible]

上よりさへひ宗祖の御あり
 しものかりのまゝに被さるはし
 へんりうききのうらふはあつた
 けり

夢にみたに紫羅の香あり

因園說

ちとあつきのめくじきよして
 佛も戒のまゝめい道ごと
 いともさすくうはたごお情
 のあやうにあらぬかて
 もあやうく一人あれぬく
 ふの山の梅の下うよなほひの
 おれ白ひは霞てきのよれ雲の人
 めけ舞もさる人おくいつねえ
 やすらうとうきりてらんぢやあ
 れ波の枕は袖をひろれてあそ
 びあそぶううあそぶあそぶあそ
 うれと老の方のひ末とむさふ
 り末路の中へさるひとさ

[illegible]

一死てまの情をいふはすくなく
ふけいふはすくなくいふはすくなく
ぬく人は七十をすれあうと
て身のいふはすくなくいふはすくなく
二十をすくは一死の志をすれ
るも一死の志をすくなくいふはすくなく
六十の志をすくなくいふはすくなく
いふはすくなくいふはすくなく
物起すくなく福を死の志をすれ
るもいふはすくなくいふはすくなく
思ふはすくなくいふはすくなく
一死すくなくいふはすくなく
いふはすくなくいふはすくなく

[illegible]

うして勝就北の貝ふなら
ぬこれとつけて二用とせんや又
二用とせんや

初葉子歌
え祢仲を芭蕉さ

庄右銘

人の能とつふと好う就おのれ
長を況とふれ

詠回

ものゝハ唇さう一秋の風

瓢之銘 山素半

一瓢市廛山 自岷梅箕山
莫快首陽餓 這中飯顙山
顔公のかまけふけふかてふも
阿比恵子うつこく種くも
あつてあふひふのひささ
是をたくみよつけてたふ
うをんとすれハ大うてのり
阿さくはさうえようつて海

とまんとすけいこつとん
わあ人田子危のひまは種
入つるふものありと中をた達の
心何それやそ用ひては土素
よきてこれとえさむ其と
葉の若し記す其のこれ山を
あつてうあふ山とふやふ
飯顙山の虎杜の住地して素
うめとふれの向あり素素白
ふかうて素素とふとん
とふのつむあふ時ちわの
素とふれふ時一素もふ
とふふて飯顙山のう
とんとあつ

物ひつ瓢のうふふの素

梅子歌

くがくこつこれありや橋町
とつ新ふを能くむ月さ
さうたふめ飯種もよう

更科娼捨月之病

一、焼酎の月とてききり
 ありけり八月十日のふと
 立をきくは敷すくれけり
 秋とてききりす秋すあふ
 一、このふと秋とてききり
 ありけり八月十日のふと
 立をきくは敷すくれけり
 秋とてききりす秋すあふ

とてりーとてりーとてりー
あふあふあふあふあふあふ
らんと思ふといふ涙もあふ
けきい

おとうけや妹ひより佳月の方
とさへもやと文科の那うや

與我人交

大和の金長尾の里といふあたり
さすうのふたきよりいへん山と
うへ山とにありすあゝ
心あゝさすうと走る母のあゝ
いふをそ家のうへとさすう
ひ庭あゝ木子のおうけあゝ
を我置て岩尾めつゝさすう
ね手つゝ枝とて矢石を携
てい海菜のあやもなりぬや
菜とりてんよと老母つゝ
あゝ矢石とて一室ありや
あやうゝゝゝ老をあらん

とうとう安かれやうと云ひて
老を憂ふた人もかこよと云
んひひ

そらぬちやぬすまはれ

吊神秋七日雨墨文

久保の久月七日の秋夜を云
こち白浪詠所の岸をひいて
鳥籠も橋杭をまのり一葉梳
と吹折るまき二葉も座敷
をうしあふてこまひねてに
るさんちゆりおちとて燈を
けそくおろし通昭小町を
吹する人まこれよりて此二
と揺りて雨墨のころをま
さ久んとす おちるま
さあははけち橋をまの上
通昭くく
七夕ふがきひくく結念羽

松

雲竹撰

海の東門を麻さうくは像や
あゝ人あまのすまのやふり
むけさば海と画てこれに
やまのやうなれい君にお
手あやうすい既又さす
ちいしとまた中にくく
まのながさくはくます
そくまのまきとまの
す

こちむちあまのくまのま

折竹賛

此竹のまれと名付るものによ
ういふのでまをひいて
枝葉のま物とあまのま
まのまうまのまのまの
うまのまのまのまのま
横植くくくくくくく
人改上のまのまのま

とありて人ぞ世のよきま
はわくもさへくひひきつれ
まてくもむるさへくひひき
はつらねく

此はちのむく桂う梅の木の

車はあふ可敷

あふあふくきよきよき
ままたきくくくの人か
まてくもむるさへくひひ
めくもむるさへくひひ
現すもむるさへくひひ
くくくくくくくくく
あふあふあふあふ
あふあふあふあふ

歌仙漢

作はふねくはあふあふ
個の桂葉とあふあふ
あふあふあふあふ

のまをあふくくくく
くくくくくくくくく
てはくくくくくく
くくくくくくくく
只これ大教自然の化若き
れてはあふ

井あ

これいさあふあふ
くくくくくくくく
ありとく

西の上人賛

すくくくくくく
あふあふあふあふ
花のくくくくく

岩茶辞

金草と稱すくくく
くくくくくくく
くくくくくくく
くくくくくくく

むづろのみ

秋風よそれてくわくふ葉の枝

成秀うき上の松とほめぬ池
松ゆりきふれんきうりて枝き
ちるもの一丈餘枝よんをかき
其葉赤きこときやうくはみ
とほやうり面をふひ枝と繋ぎ
筆は似あふは枝よひて浪は歌
ととく當時牡丹をやする人
奇とほつ免て他はうきうき
とほきる人き小輪を渡りて人
とほくそふ折本柑枝きき
とてて枝葉のかきうきといふ
時松ひよりおほくはうき四時
常盤よりてきのもをけ
きとてうき楽天曰松とく喬
木とほ友よりき葉をけとま
人目とてうきとての心を慰
するのみはうきは長生保壽の

言歌とてきやうくはきとて
る

元禄四年仲秋日

我余記

古き松とてきやうくはきとて
かきとてうきとてきとてき
とてき葉のよきとてきの上
とてき葉をけひきとてき
とてうきとてきとてきとて
うきとてきとてきとてき
とてきとてきとてきとて
一物とてきとてきとてき
は枝のよきとてきとてき
とてきとてきとてきとて
の葉とてきとてきとてき
とてきとてきとてきとて
とてきとてきとてきとて
とてきとてきとてきとて
とてきとてきとてきとて
とてきとてきとてきとて

むのふみ

秋風をよれしうけふ葉の枝

成秀の庵上の松をほめし酒
松ありきと云ふ人より下枝を
わくもの一丈餘枝上へんをかき
貫葉の森とて云ふやうにゆき
とほやうり面をふひ波を撃す
箏は似笛は似鼓は似て浪は歌
とてくぬ時牡丹をさする人
奇をとほつて他へはさう菊
とほきく人を小輪を吹て人
とほくそふ柳本柑猷を客
とてて枝葉のかさちをいへ
時松ひより霜枝より四時
常盤よりて志のものをけ
きとてつ楽天曰松は霜
葉を吐友より葉を吐と主
人月とてうとて心の心を慰
するのみはほくは長生保壽の

雪歌を記すなりは雪をさ
る

元禄四年仲秋日

我余記

古き松をふかき中をいそぐ
かきとつてて悲しくいふ
とす松葉のふかき中をいそぐ

かの月とやと一過海の花
糸のち一糸とさうさう一糸
きりくはとやとさうさう
みて霞かよひ三百餘年の
雲龍とさうさう龍一匹とさう
くしてみのふ大地の腐とさ
る龍もさうさうひとつとさ
の情とやとさうさうねとさ
とさうさうのさうさうね

如仙院記

石山のおく岩屋のうしろ

[illegible]

侍はかみひしむくすのちよ
 すいふもおもひあつれ山
 は古人をかきさうやう歌子
 又う峰移撫とふ山あり壽
 の里いとくろく幾つてあ
 るやうとうとみけん茶葉集
 の深なりなり成能をくま
 ふうんといしろの海よそ
 ひの片う松の棚つくう終の
 氣望をあて終の擲うけと
 名つくかの海棠一果とふと
 あひる唐崎う花とひす人
 うま相徐ゆる虎うをゆひに
 只離辟山氏とありて居新
 り足と投ぢーや山う風を
 ひひりてやすすもあひや免
 める時の苦の海よりをぬてう
 うう炊くとくこの木とまひ
 て一燈のそふ人をうろへは
 と昔後けん人の妹ふ心なく

佐助の徳をめぐみ置けり
きもれ持件一万を福と
ふの物とむむくよとぬ
うきつゝつとてと筑紫の良
山の傍にわが後れ甲斐守
う殿子とて此の山より
いそそつたてぬ人なり
歌とていとおとせぬ
幻佐助の二さまとて
そまの記念とてぬす
るて山にたてぬ
歌とていとおとせぬ
松笠越の首義けり秋の上
れねとていとおとせぬ
ゆふとていとおとせぬ
おまのふりとのこととて
てのふれ福とていとお
のふれとていとおとせぬ
いぬ農法は改てふ
うれい歌とていとおとせぬ

よき人なりやまハ之折念の隣
 義の中はありきやうと機を拒
 けりかゝくも強備を後の上
 り起りて終に敷中の墨芥
 とふれり昭君村の柙巫女廟
 の花れむつゝもあひやう

くはうや竹の子の人の果
 花山敷れきけやや竹の節
 斜りなては花柿やう留るんね
 来より来より来より来より来
 来より来

廿日小暖暖の来んと船紅
 尾事や来途中の吟とそ
 得

はふ河より竹の子のやま
 花柿今いむつれ河の
 竹の子にやうてやうて散散す
 あふしは竹のみうれき若
 のこやうりも今の河それさ
 さきうやうやうやうやうやう

車は型もはなれりやうて
 寄石懐松も花の下にかくれり
 竹根のあは袖の木一もたか
 けりやう

袖のふやむう志のまん神理の
 ほどきき大外敷やうも月取

すやんやうとあは暖暖の山 尼河紅

す来足のあより来より来より来

あは贈ては宵に船紅交ぬやう

めて花屋一張はきんきんきん

は花もつゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

廿日暖暖の来りけりやう

主於人又於

山里にこそすて侍とよこころ
ひかりすべしと思ひつゝもめを
猶ほむけとおもへりまづねと嘯
浪士の田舎の井の国をわき
まふ半日の末としあふと素世
はと紫を帯よりそれむす又
うき家とさびうきをかんた
とある寺は福居してひい包
常衣をきたる僧侶すし而も我
れよりゆきゆきとして朋友門人諸
息ともありことごとくそを井ぬわ
状より予の信雅一芭蕉の田舎と
君の家はよくある

又云

赤任とてろろ杖二丈をうり
 しと櫛一本外ハ赤い色と
 るとととと
 りと櫛葉色はろろととと

あゝくそのはききも equal 似ん
船よりおくまゐるわくおとろ
れて終は残り equal 言ふまで
そ東東と陽とを歌い人もわく
昼間これ歌もわくもぬす
に切短なりと出たう反歌を
尋ねてあきさきには違ふ
廿二日船の方雨降る人もあ
くさひきき中にむき出して
遊ぶ其詞

光武三年

物寄の書にえううううう
お代やおさねおやう
廿三日

廿三日

手と打ふ木魂は鳴る夏の月
夜の新や木魂は鳴る下弦の音
笛やあそぶふゆの後のすみみ
麦の穂や涙より実て帰るを
一つく麦あそびみて思ひそう
能くしの焼く家ときあうに
廿四日 歌麿柿有

廿四日
題落柿亭

凡兆

聖植の物も本流をたもたふべ
 多し及てす来京より来る猪
 所昌隆より消息大はの尚白
 より消息あり凡兆来る望雲
 福寺師ふま伯ん兆来る福
 廿五日子那大はの尚史邦
 文草尺牘

文草尺牘

題落柿令

源對喙峰伴鳥魚

轉荒蕪似野人居
枝改今欠赤虬卵
青葉々 既堪學書

爲小督讀

強挽悲情出深亭
一輪秋月野村風
昔季僅的求琴韻
何處孤墳竹樹中

途中の山

河とまゐるや校も梅さふ

美山古く感句

杜門負句陳
每已對客揮毫
秦少游乙卯
來りて武江の
影并媚玉ふ
かの仙姑一
是貴中より

半信の言を果てて病に

印井崎とろろかゝるに
其角

腰の簀こおひさし月

世より人よりすむひら

一(春)の候に家々ききり
能くしの候に家々ききり

廿四日 歌落柿令

凡兆

重植の樹も木立をなまきり
多し及てす来京より来る猪
新昌府より消息大はの尚白
より消息あり凡兆来る望田
福寺河ふまゆる凡兆来る
廿五日 子那大はの尚史邦
史草人訪

歌落柿令

河對喙峰伴鳥魚

能荒我似野人居
枝改今欠赤虬卵
青葉く 既堪学書

為小督墳

強挽悲情出深亭
一輪秋月野村風
昔季傳の歌琴韻
何と孤墳竹樹中
芳切より二葉の歌

史草

途中の水

河くきみあや校も梅さる

史邦

美山言く感句

杜門貢句陳無已

對客揮毫秦少游

乙州来りて武江の影并嬌玉

分の能知一色貫中

中條の青葉入るやとて病

印井崎とるよりかゝる死 其角

腰の簀こねむる月

世分より人よりすすむひより

嵐やうき

物寄の雲はえりて月が
お代やおきねはちか

廿三日

手とおふ木魂はゆるる月の
夜のおや木魂はゆるる月の
筆やおきねはちか
麦の穂や涙はちか
一ひく麦はちか

能あいの残るちか

廿四日 秋落柿

凡兆

麦植る柿も木魂はちか

空のふたは、雲をかりて
 つまらぬを免れてゆくす堪忍
 車の別れうつより雷電降る
 終やとさる時電降大なるそ
 かゝ極の時一ちひきよふは
 のこり

廿六日

夢のうら二葉をまける柳の煙 文章
 とくけの雲よりさうれを 芭蕉
 増生ふのもけあらぬ 中興
 人のくむうち物籠やあり 文章

河内田原新井村由道之町田
新井村

新井村の町田新井村
新井村の町田新井村

町田

新井村の町田新井村

二日

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

新井村の町田新井村

江州平田の熊寺より由緒尚白千
那る消息

竹のまやふみおのちれあき由
此方の肌急きうく卯月か尚白
是を咬

中をみつゝもちし舞稼

二日

曾良来りて昔時の花を尋ひ熊
野に詣たりて武江四友門人の
樂かれとれをすゝめて流す

熊野の湯やふけつ入い夏の海
大崎やうへにわくをぞの果

ううてもうかゝの髪をろく眉
をさしてははねたらのちうす
のふいふもいふの葉もねは見え
の目袋をちやふくぬの白髪をさ
よはへーやうふれおはるおめを眉を
やうさういふの月の光をうか
みはけつ

ひよこへはほくほそちき秋の朝

集巻

代のかゝる人にもたまはるまね
ういふものよちやけついふお
そちけい矢の光も田をさして
何のいひつても昔のまじに
おやうにさういふのあす歌
ううあまてけつてもんけつう
神をえおのうちさういふま
さうさかゝのおねをけつあまの
末修防の山中へまゝ親父母
のいふまゝかういふおねのむ

如く上人の法教をばめ置て
なまぬかきもに安置しそり
とににそめ人の方を費し上人
の教にそりしそり侍るもの
く候も為て侍るもの
石基にぬる木侍る

又そり物をもあしそり上

贈風流子孫

うしちんくわんめいりち
くわんめい

たゞや肺の弦に泣きの糸

幻化危賦

五十年やうのふちの若松の
志本とありて福永のかゝと
うゝねひみの虫けゝのさゝね
てりあふふゆきゝのさゝね
かの宗鑑とあることをおたふさ
結圓の政院の試とさゝねて
松島白河の面と黒くゆきけ
は山と被とぬくは若松の
外の候とありえりうゝゆき
尺やんやんとあるうゝゆき
立付ると回りまゝゆき
ものゝゆきとありてゆき
うゝゆきとありてゆき
あゝゆきとありてゆき
うゝゆきとありてゆき

海の底に磯を築きしを破てと
 御もつはとらふあゝよしの葉
 のふれとくするへま芦の一葉
 けやうと求るゝえんを切花
 と云ふ山を風ふくとより古
 うやゝのこせをいふ根おの
 つゝ情して憂ふふゆかんと
 らゝかの伝抄ゝその戸に勇士
 昔にも此水子の伯父なる人の
 け世といひ一語とやうな八と
 ぞとらの言なりて構はすや
 るゝのちすゝはさりやくと
 知見す候もこれにてわの一字
 は海にそなる迅速のことわり
 いふともいふべきこと何に
 山はさすふ深き人かゝるは
 とゝなるて石山をあゝ何と
 岩万山のきりゝまり南無あ
 なく崎よりありゝ水はるゝ
 海をひいて流るゝ外月

三
四
一
くもあへて
くもあへて

古きよや 晴の空に 霞のふ

幻燈花賦

五十年やうにふたりの若衆の
志本とありて 福来のかゝと
くくぬひみの虫けいのさるれ
てれあふふふふふふふふふ
かの宗鑑うさるゝことをおたふし

風流物語の變化とて其の
 寸草ひかりやとやうひ文と
 然てまきりぬ

松島賦

作とありまされと松島を抜来
 舟一の菊風ありて凡酒を西向を
 馳次来ありて酒をへて紅の市三
 里洲にの渡りてふと十二時あり
 百のききて敷くつて天をゆひに
 伏ものい波よきとてふ或ハ二重に
 登りて三重にたみきたりと
 うれ有るつて船に負ふ阿久抱る
 阿久兄妹をすくとも一内あり
 とみきとてふひあうとてま
 はし由地をぬきまゐる屏風あり
 色ふくくつて阿久の小舟をよつれ
 ていひのれありとてふくくくく
 うあーもとてふけん彼をきく
 束の松山をきくとありてねのひ

ひねねとひささささささささ
るふもゆき本居の松の三越
の昔のけり枕の上の松のけり
けりひささささささささ
ねとふささささささささ
兎の豆畑のけりねとふささ
ねとふささささささささ
けりもねとふさささささ
ともねとふさささささ
ささささささささささ
ささささささささささ

少しそとまきつておきかゝりて
とありやう敷りの末も強ひて
那のよとて懸へ所田の玉川
仲のふと海地のふた武くや
のねねびさうひふふとありた
ころは地の中のと海へは地うぬ
のめ神はつ神あのお勝花
文治二年泉二市家進と卒
後高う破の地つふふとて地は
沙のふと海の底へ中程を濁さ
ちのお勝ち時教入その建立
あふふふふふふふふふふふ
四市もあふふ入海地の後年
ふふふふふふふふふふふ
て七市地はつふふふふふふ
ちふ海岸の時走校のけふふ
し花緑波ふふふふふふふ
あふやうふふふふふふふ
て屋敷あふふふふふふふ
とふふふふふふふふふふ

人の形を懸ふふふふふふ
うふふふふふふふふふふ
化の天ふふふのふふふふふ
何ふふふふ

月入城

とふふふふふの月入ふふふふ
らふふふふふふふふふふ
中の人ふふふふふふふふ
ころふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふ
のふふふふふふふふふふ
とふふふふふふふふふふ
西ふふふふふふふふふふ
玉川ふふふふふふふふふ
そふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
智月ふふふのふふふふふ
何ふふふふふふふふふ
中ふふふふふふふふふ

二井寺の門にうさぎの月
 まるくは持鼓のむくしぬく舟
 こころのけひさかぬ人いけやう韓
 愈文まさもあはれむ買あう
 詩集ももともぬ金詩人ま
 こころのけひさかぬ人いけやう
 石あやとぬぬまうこころあや
 とりてさかしの月あはれま
 ほかに月を名寺山の本より
 入ぬ

既望賦

日月の終真あけやまの空
 二ころのけひさかぬ人いけやう
 浦あやとぬぬまうこころあや
 あんたんとぬぬまうこころあや
 のぼる清れて群鳥狂おれ月
 にうれてまねあうと船の中
 まうあやとぬぬまうこころあや

あけやまの空あけやまの空
 二ころのけひさかぬ人いけやう
 浦あやとぬぬまうこころあや
 あんたんとぬぬまうこころあや
 のぼる清れて群鳥狂おれ月
 にうれてまねあうと船の中
 まうあやとぬぬまうこころあや
 あけやまの空あけやまの空
 二ころのけひさかぬ人いけやう
 浦あやとぬぬまうこころあや
 あんたんとぬぬまうこころあや
 のぼる清れて群鳥狂おれ月
 にうれてまねあうと船の中
 まうあやとぬぬまうこころあや

らにてもううぬおひぬんはう
 急の松を伴くまよとやうのう
 は長くく人少く日をめくくせ日神
 獄より反腕のなかりてまよとあ
 ももんものゆくはひをやめくさ
 うと袖先はまておの松に糸
 を小松のかけふかれて月言ち
 の入おふ此夕くれとぞむは
 うりあり

烏賊

一鳥小大ありて名を矢くす小
と鳥鵲といひ大と鵲とといふ
は考る反哺の若を懐くを考
の曾子といふす或人おふゆ
人をつけ報はるを題とあてて
二里の媒とありて或人太夫の
やとを考て是を風をさとしり
果とありてむとありてを考の
けちのやとさけけよみは

うさぎと大うさぎと其書とせえさる
阿やうりし海といふ心食飲す
てかいらふと書くはていふ人あり
く書物といふ歌氏もこれを惜む
俗士も甚うとむ嗜海といふに
しめ昇り交えようといふ是の
令鳥と冠とくれんと成

阿蘇神集序

尾陽達左權本半とて人爲す
子集と阿みて名を阿蘇と
云何故よけ名阿蘇とすといふに
予とてたかまひやといふをひ
心は格おきしわくしめひ格阿
つめておれりといふ其日格おつ
おとてまの目又まといふやうす
しやきといふたやといふの案を
標のふふと阿といふの標をの
おのつておといふ風情といふ
ていふて常とていふものも阿

れんしや系遊のいといふ心のは
のさうおふようたといふひめゆりれ
はよつたや書の大おといふれとて
やとてまの目又まといふやうす
まといふといふ阿の系は阿といふ
おれといふ

銀河序

お陰そといふ柳といふ城はまを
といふといふとまのかの佐渡といふ
海の面十八里餘波を隔て東西三
十区甲といふ横といふといふ海
谷のくといふといふといふといふ
といふといふといふといふといふ
いふといふといふといふといふ
まのくといふといふといふといふ
めといふといふといふといふ
のめといふといふといふといふ
只おといふといふといふといふ
かまといふといふといふといふ

うもたうて其智をせん
あやうい海にもふ心貪欲
てかたうとまゝにほい人あつ
く貴族といふ歌氏もこれに悟
俗士も甚うとむ時をぬくはく
一の舞う矢えよううて二足の
令鳥に冠さうれんと成

阿蘇神集序

尾陽達左權木中より人あき
る集とあみて名をゆつ時と
え何處よけるはともやうに
予とてたかきひやうといをひ
心はねおきしはくしのひはね
つめておれりといふ廿日新あつ
おしてまの目又あうといやうす
よきまゝにたやうの集を柳
様のひふとあつその柳の
おののこあつあつ風情よつ
ていふ事とてあつものもあ

れんよや集遊のいふ事うれ心の
のうれあうたうてひめゆれあ
はもつたを花の大あうとれとく
まゝ集のまゝなりあつあつその
あつあんとひあつのあつあつ
あれう

銀河序

小陰そより柳より花はあつあつ

しひゝまて暫時の精進をいひて
んとするほど自改は海に決て月
夜のそく報は天よりうけて
星きしと見えたるは仲の
あふう波の音きこえてひて
たすひけつとてよく揚ちき
きこえてるなりとあひ来さ
れい子の抱かされてうき雲
の被褥あそび外くして居る
ちううよあんた

河海や他波は換ふもの

停野紀行跋

林あゝまのたもけく密い
 いたゝやゝふやゝひつゝ
 るたゝわれゝの妻ゝを其
 一とをたのふゝふひひ
 了る向井氏と来のめゝひ
 ずゝき契ゝて他ゝのゝゝ
 るやゝゝ甘ゝ辛ゝきゝゝ

木のこゝろを又よむとすうへす
 うも〜〜〜し〜〜〜の静謐の
 ぬくみあるふしうす〜〜〜
 種新ありけり 夫は虚寂を参
 け者なりと人ふす〜〜〜とれ
 とや其は能く感ふのふし
 ひ南無の心をふとや強り
 玉び〜のふしをいふと
 めん〜のふしをいふと
 はまの心と〜〜〜静は人れ
 物とれ〜と〜〜〜人ふす
 てはふと〜〜〜ふしと〜〜
 ま〜〜〜人あ〜〜〜たふ
 して〜〜〜ひの心と〜
 心と〜〜〜心と〜〜〜
 と〜〜〜〜〜〜〜
 一〜〜〜〜〜〜
 と〜〜〜〜〜〜
 け〜〜〜〜〜
 け〜〜〜〜〜
 け〜〜〜〜〜

うの〜〜〜ふふと〜〜
 けは甘ひ〜と〜〜
 く〜〜〜〜〜
 あまのき〜〜〜
 糸のけ〜〜〜

虚寂集跋

聖とよふ一書サ味四行

李杜心通をおきて暮るは静
 とす〜〜〜〜〜
 け〜〜〜〜〜
 倦〜〜〜〜〜
 西のふしと〜〜〜
 能く集や
 無の情〜〜〜
 子ゆの心〜〜〜
 陽人の心〜〜〜
 う〜〜〜
 下のお〜〜〜
 姑の心〜〜〜

[illegible]

うのいゝうふ再をてれて是なき
 け廿四夜をわて秋の夜をよ
 くときあけ来をよ雨をえて
 あまのきよはつううとのむしの
 欠のほくあふりせう

虛實集跋

藥とよふ一書廿味四行

李杜之心酒を交えて寒ふは清
 とすこれよりて甘南人々
 けつて再びきくにを

先ずおのゝ危の情を述べず
氏うゑをばさうさうして物に

救ふまゝなり

其時震動をまゝさうして其
の島へ向と移し其の島へ文を
と送りまゝ他の島へ文を

送りまゝしてはのめす

卯月の中は次すの備へんす

るれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

しるれはまゝ移し

又さすにあらうかやあらうかの
ふかときえぬくまのうの中
五月十八日まの海おろくかの
まよすうかや人を思ひあへ
かひうへんかやあまううか
そのふさううかまえあへぬ
かひうへんかやあまううか
まの海おろくかやあまううか
のれすむみかやあまううか
おのほろくかやあまううか

歌

かひうへんかやあまううか
まの海おろくかやあまううか
のれすむみかやあまううか
おのほろくかやあまううか
かひうへんかやあまううか
まの海おろくかやあまううか
のれすむみかやあまううか
おのほろくかやあまううか

東明傳

老人東明は後代して其祖父
河内望田の農士竹氏と稱す
後代といふものは晋子母を
よるものなりしと七十第二
とまの秋の月とやあまううか
かひうへんかやあまううか
まの海おろくかやあまううか
のれすむみかやあまううか
おのほろくかやあまううか
かひうへんかやあまううか
まの海おろくかやあまううか
のれすむみかやあまううか
おのほろくかやあまううか

上は生れて東野に預けとて
必大臨新市の人をたむ
八月は流し杭の田隅のま

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, mostly illegible due to fading and ghosting.)

袖珍抄消息之部

古終舎黙池

一ツ紙にきくやありひ切く
しきめを点し初はひす
能く感ん思ふもありろ
洞子見子の痛足の時
あはれかほとよきなる
凡そ下の紙にきくやあり
かうねくそつをけく
秋の序りく一板りす
Pはきく相違ふ句とも
るる結り付あきめ耳
材にきく句符のきく
あきめくきくきく
えきくきくきく
つしきくきくきく
指のきくきくきく
句符のきくきく
すしきくきくきく

[illegible]

花より先入を新お茶より先で

又七事を後子に示して常々之を

炎とともなるものなり

て今の人をかく抱へるにやむ

ふまゝに成て六川物と好む葦物の

阿公限人々所々中西聖書の時

此乃大名也

世よりあつてを勝つて入

華あり

卷之五

うそをいふはよくない

人曰之者之曰者之

しるあまのねくこ病来に業

七

二月廿日
不孝

惟也

○

事や機をぬくこと

白石の美奈子

古事類聚の序と後序

美人をよみて予、耽吟ふ
いふもよみけ付味難極い
名いふもよみけ付味難極い
銘いふもよみけ付味難極い
ひろめいふもよみけ付味難極い

も附句

森の中いふもよみけ付味難極い

とくもあふい

春のあふもよみけ付味難極い

二月上旬

も附句

本因縁

も附句

春のあふもよみけ付味難極い
名いふもよみけ付味難極い
銘いふもよみけ付味難極い
ひろめいふもよみけ付味難極い
森の中いふもよみけ付味難極い
とくもあふい
春のあふもよみけ付味難極い
二月上旬
も附句
本因縁
も附句

春のあふもよみけ付味難極い

其古き 葉國集卷七

春のあふもよみけ付味難極い

春のあふもよみけ付味難極い

も附句

春のあふもよみけ付味難極い

二月上旬

も附句

も附句

春のあふもよみけ付味難極い

春のあふもよみけ付味難極い
名いふもよみけ付味難極い
銘いふもよみけ付味難極い
ひろめいふもよみけ付味難極い
森の中いふもよみけ付味難極い
とくもあふい
春のあふもよみけ付味難極い
二月上旬
も附句
本因縁
も附句

夢人老をすし予、睡ぼろま
りとも予は付味難き位に
念ふものもなきふくこのち
銘じそふくやとそとあは
ひあめくあのもち極はあ

も附句

森の中ふふおきやあえて

とつるお白よ

春のあふたのあはれとあはれ

志を了察のすも一兩人の心を
子望を隔く月夜云々
さうさうさうさうさう
日本被るべきをさうさうさう
いふ飲料言ひおさんおさう
さうさうさう一毫の遠ささう
完ふさう

自後の如

古徳まふ人たふ徳を付く者
 忘さくを中忘さくよりましそ
 若ふ鳥を有て一物ふ意を
 附けあ時あふれはさるひ
 心を似せさる古徳を来来
 つるの極るまの時を秋を来
 芭蕉の徳もろく破れんやそ
 け一はこれのそにぬるうりそ
 少くち鼻さるくおと死ふ所
 のあへりねくふするやうに
 おちくふ

飲酒一枚起精

めろくくわのねふろくの上戸
 まれな〜〜やな〜と海のものやも
 あ〜ん又かう〜とふふふふのそ
 然る後やあ〜ん只けしきねあ
 おふふ南を河臨地ねふてね
 ひねくね生さ〜と思ひ〜とて
 一杯のむよりかあねる海へいね
 但〜ね四藤の青ねとやふふ
 ひふ海宮も決定〜とねじ
 き海青ねと〜とあふ〜と
 義ふふあ〜いふふはく源ふふ重
 へふふの海宮ねれひふふふふ
 性ふ〜しあひ〜とんとあふふ
 人ふふと〜二代のけしきふふも
 一文ふふ思ねのふふふ〜と
 下ふふふふふふふふふふふ
 一ふふ海を飲〜

右飲海二枚知徳の事如親王
心持の事一知徳の事人の事

子いふ事なく樹物より一床
にうりあるふ所なりし面を
中花なりしと雲一帯の空を
乃て大海とせしれをばつる
と云ふ大海の空を何れ

おのりてあやめいふ所を
おのりてあやめいふ所を
おのりてあやめいふ所を

十七日

と云

廿二日

○

おのりてあやめいふ所を
おのりてあやめいふ所を
おのりてあやめいふ所を

一思ふ事なくの句

かゝるの松をたふし樹を

ふ所をたふし樹を

をかきとくもくもくもく

くもく

一此秋は葉のゆきふくまき

とあふくまきふくまき

ともあふくまきふくまき

かゝるの松をたふし樹を

くもく

一廿二日

おのりてあやめいふ所を

おのりてあやめいふ所を

おのりてあやめいふ所を

おのり

一廿二日

おのり

五月十二日

おのり

おのり

○

乙お上はくまきふくまき
大木とて一木とて一木とて
おのりてあやめいふ所を
おのりてあやめいふ所を
おのりてあやめいふ所を

子ハ美ヲ学ブニ樹物ヨリ一床
にうつらふといふ所なりしハ西宮マ
ル君有らむと書ハありしかども
乃ハ大海と云ふれハあはれなる
と云ハ大海ハ平海なるハ一
句

ナナ

と云

其角より

○

其角より云ふは其角の角なり
と云ふは其角の角なり

一思ふと云ふは

かゝる所の松をたふし

ふは其角の角なり

と云ふは其角の角なり

と云

一此秋は其の角よりいふは其角の
と云ふは其角の角なり
ともあふらむと云ふ所の角なり
かゝる所の角なり
と云ふは其角の角なり

一其角の角なり

此角の角なり

すすうくす族が都をかくて
十の指をさす思ふ別はす指
さるへへ能くは情の海にまで
あ

一紙通るゆへ大坂までをゆるに
いふもののゆ推量いふに甘
老に年いふよりえん事さる
るゆへに好むたふれいとも
西行能因のま似あさる
くといま生の人すといふ人
う考のゆとあさるゆへに不審
あさるゆへにゆとあさるゆへに
不審はすいふゆへに
てありともゆとあさるゆへに
ゆとあさるゆへに
ゆとあさるゆへに

二月十九日

いふ紙

出水様



酒をよむ状ういふはなれと

とさる船のりゆいめ何れも
の指圖にあつてゐるべく是れを
やうに伝へてあるものなり
見たとあるは是れは是れを
いふさうなれど人によつて
くわいやくなり

○
池邊の天竺の寺も甲斐の望
よりうつりきりて若かりし
といふ聲のほろおきやん
されともはるばるのつぎに
けふの寺に大いなる感心す
まなもはれぬやうなり
いふ名をよめよといふ古
人もいふるなりといふ
いふことなりといふこと
あり初めはめくくははる
能くすめふれすやま中たり
なりといふなりははるなり
なりははるなりははるなり

四月廿四日

いふ

お枝丈

○

此君今より白き斗をうける

一は信ふすえ、越えよとの故

かく見えぬやうに只四葉あり

のすけいといふなりははるなり

くははるなりははるなり

えりやあの上よ末たうて

さういふ感心す神代のもも

なりははるなりははるなり

なりははるなりははるなり

なりははるなりははるなり

なりははるなりははるなり

なりははるなりははるなり

なりははるなりははるなり

なりははるなりははるなり

紋様美くしほ

二月廿四日

芭蕉

水枝梅

後人の語若てやまず花のま
何人かもしううなすも入
萌と忘く流人いすとも

○

然もつ約束くも難備物終示
恥事あけさとの人くは別を
女子をも集り我を養老の程
わをうくいけ師先玉雨よ
より一向言とくぬ人つす
り吹てやまをきくと悦ひん
床前も木曾より世のひん
時を留もつすつてけき細い
る難備物人ハ何人くもあ
つ面傷あつて是もつすつと
おまにりつたつとも物やいの
何れもお慈平の物細く人
へ謝れ紋すくい紋すのたを

かうくも難備物も只ゆい
かうくも初冬のやうな難
くねとあも散りおも何
人のく半もそり細きけ
あつてつてはと心とお達
つてあつてはともつてき
云のふくつてはの何人
尺れいあつてはつてた
へ較さすともつては地
ちつてはつてはつては
くつてはつてはつては
もつてはつてはつては
とつてはつてはつては
これいふあつてはつては
摺袖は小袖のねやぬき
縁の人もつてはつては
すつてはつてはつては
いかにあつてはつては
ねとあつてはつては
中の人もつてはつては

ゆきしほくしき

くしすや餅事集する様のえ

二月十六日

芭蕉宛

一笑候

又武士に教生するものなりと
云人しす人天竜を捕く
強くせんもあやしくし
只心の平きあひなれく
の痛沙つす方これよりむ
りし先料理よりい飛し
すく

○

附合士七体あ我と記を初
らふ人しをさすくは術
のつぬうらふは味を付んと
つて一部で一向も個に附合
もあれぬやう成りのは又
むのうきまのありけり味
はともすすくと退くも
何ものそい術けいひは

扱ひて一事のそい甚むり
うきぬうそふの付あつてを
成り事あふい情あつて巻し
て付て変化ありてく成り
さるあふ人にお成るをさる
く付するあつてくあふのみ
致しはい初まるる切意に
て二とふも附する上はあつて
付るもな天はあそをあつ
くくあつてのそい強くう考あ
扱ひ成り鬼は強棒よりて
有る人の中にもさ七人あ
てあはれあふあひあつて
も付合の術さなとくあふ人
あつてあひあつてあふあ
くくあつてあひあつて十七
をあつてあひあつてあひ
とあつてあひあつてあひ
あつてあひあつてあひあ
化はあふあひあつてあひ

十七夜のはより、うけりて何ぞそ
ろ變万化の働く出来ず。か百
顔の白く及ても附心二作をき
不やい知るものいひひ小意に
とやくうつるまおほく後うい
人といけて通しおもしろい
只四人向んの迷中して互に他を
そうすき懐ふ感かけてハ儼然
手這船とくえを付くれしもさ
ゆいといふ迷中業のありて

此書

六月廿七日

義

結ふよりや当玉のく清み
 水枝換

小枝換

名月も悲の涙はあられ散り
 雲も雨もあられ散り
 空も霞もあられ散り
 白くくく

擇の穂たるをいさげをふ

秋もとよ吹く月分る
あけくさくさくさくさく
先づ舞う月か生人挨拶
男うさぎのむねや秋の月

八月四日

義

子形模

居士秋の城東秋の城東
 乃舟窓大夢文信の心
 赤く夢の心と名残市
 手頃日いさううとそ
 出るとその変化愛の
 入つあつとそある大
 の心で夢の心とそ静
 すとそされとも頃日
 赤く又と名残市とそ
 中夢の心とそ名残市
 赤く又と名残市とそ
 赤く又と名残市とそ

集抄よりあつたのを念をたづ
むるに愚服あふまふ人足付さ
あつたに二渡西上人と書ひし
しるす中しるす中しるす東の
とみかたがうを引付の毛
びるるやとてなほし
く

卯月廿

五

此篇

子川

多岐人ともいふやうな

○
一松尾藥店との白物出て居
引さくものれやと直ぐ
振子のは留と云ふものは
い服とい草とい種ね違ふ
祝儀式式儀諸々人の挨拶
すく家より上と云ふ人の
白ふをぬるやと云ふも只
今よりいふ所の所と云ふ換

[illegible]

十月廿五

壽

小枝梗

覺

一
多
米

一
外

一之乃聖

一升

一
河
孔

己合

有る夕會の抱合は成り
 山崎と佐吉と持ててゐる
 桑の一本の井もより海
 ろうひいもねもあつた
 中ち入る

十

之

卷八

○

山臥月桂雲門餅
屋後松蘿起別桑

佛は種子のひまきもの松

中々ちかくるはうくひまの終

いふより、俳諧の文化を説く

くとも天の主人の意あり

又性熱。ゆゑに吾ぬ契機と

菓子喰ぬ飯糰の上へ

ものつけ

黃燾不黃卷之四

阿字うおくおとあふんまふ

9月

桃

像化様

○

此は、能勢の赤ふも、
心の中を、
む其角、
及、

廿二

仁

書、

○

初、
其の、
と、

桃

ち

又、

○

此、

七

桃

○

二、
の、
は、
は、

一、
は、
は、

十七

桃

○

筆、
は、
は、

殊の外珍味なり

七日

とや

三頭指

○

新麦一升半に中油のやれ
海苔汁とさへ混ぜて油で
煮る麦粉一市山を二重
糸なり

ふゆあて福寿草や草の月

○

枕屏風をひきおろし
おぼしめし掃きせんこ
おとまり付たり

板指

とや

おとまり指

いふかき指一たり七太指

○

いふ

いふに指しとて運動学流
古瓦規と鏡と下其角と

二人の一軸に思ひけり

一あるやうにありし日亦

上り来りし小雲撫大坂

十人あはれしつれに

あはれしつれに

心付くしあはれしつれに

とや

廿四

とや

とや

○

とや

とや

とや

とや

とや

とや

とや

とや

とや

きこふてしやうし事止めざる
といふ白あつて白を病状と
云々文と味合く読んたり

と云紙

荊江文

○

その日と寛く書かふはあつた
其角も一あり中へ事武へ海
中へたつて夕陽あつた
書かふと書かふと作合
書かふと書かふと作合

七月十日

と云紙

荊江文

うしと物のはつ月とけ
あつたと書かふと作合
古たや書かふと作合

其角

○

追り入るゝと書かふと作合
追り入るゝと書かふと作合
追り入るゝと書かふと作合

二つ度と書かふと作合

追り入るゝと書かふと作合

追り入るゝと書かふと作合

追り入るゝと書かふと作合

追り入るゝと書かふと作合

追り入るゝと書かふと作合

追り入るゝと書かふと作合

追り入るゝと書かふと作合

追り入るゝと書かふと作合

追り入るゝと書かふと作合

追り入るゝと書かふと作合

追り入るゝと書かふと作合

追り入るゝと書かふと作合

追り入るゝと書かふと作合

追り入るゝと書かふと作合

追り入るゝと書かふと作合

追り入るゝと書かふと作合

追り入るゝと書かふと作合

追り入るゝと書かふと作合

追り入るゝと書かふと作合

追り入るゝと書かふと作合

いふ事いふ事入らん

卯月廿二日

と云

風流文

○

井より分お替る月見の事
有く白くくまに集るもに
て是よりほの白もたまふ
まじひの白もあやうき
これよりまじひの白もあやうき
有末の白くくまに集るもに
有るも白くくまに集るもに
有るも白くくまに集るもに

十八日

批書

如新文

○

只今田舎の増進三三人集
如く一戸の増進三三人集
如く一戸の増進三三人集
如く一戸の増進三三人集
如く一戸の増進三三人集
如く一戸の増進三三人集
如く一戸の増進三三人集
如く一戸の増進三三人集

招く如く一戸の増進三三人集
招く如く一戸の増進三三人集
招く如く一戸の増進三三人集
招く如く一戸の増進三三人集
招く如く一戸の増進三三人集
招く如く一戸の増進三三人集
招く如く一戸の増進三三人集
招く如く一戸の増進三三人集

二日

と云

かきやう文

○

保生伝書

元の文

少将尼の文

と云

菊の文

井波の文

玉屏の文

和歌の文

和歌の文

和歌の文

和歌の文

和歌の文

和歌の文

和歌の文

花のふもあふれり
い上
とを成

○
尾のふもあふれり
とを成

○
中尾尾張大根のふもあふれり
とを成

○
味あふれり
とを成

○
自尾別廿二はふもあふれり
とを成

作ふ文

○
一 桃海白お勤ふ思ふ
二 桃海白お勤ふ思ふ
三 桃海白お勤ふ思ふ
四 桃海白お勤ふ思ふ
五 桃海白お勤ふ思ふ
六 桃海白お勤ふ思ふ
七 桃海白お勤ふ思ふ
八 桃海白お勤ふ思ふ
九 桃海白お勤ふ思ふ
十 桃海白お勤ふ思ふ
十一 桃海白お勤ふ思ふ
十二 桃海白お勤ふ思ふ
十三 桃海白お勤ふ思ふ
十四 桃海白お勤ふ思ふ
十五 桃海白お勤ふ思ふ
十六 桃海白お勤ふ思ふ
十七 桃海白お勤ふ思ふ
十八 桃海白お勤ふ思ふ
十九 桃海白お勤ふ思ふ
二十 桃海白お勤ふ思ふ
二十一 桃海白お勤ふ思ふ
二十二 桃海白お勤ふ思ふ
二十三 桃海白お勤ふ思ふ
二十四 桃海白お勤ふ思ふ
二十五 桃海白お勤ふ思ふ
二十六 桃海白お勤ふ思ふ
二十七 桃海白お勤ふ思ふ
二十八 桃海白お勤ふ思ふ
二十九 桃海白お勤ふ思ふ
三十 桃海白お勤ふ思ふ
三十一 桃海白お勤ふ思ふ
三十二 桃海白お勤ふ思ふ
三十三 桃海白お勤ふ思ふ
三十四 桃海白お勤ふ思ふ
三十五 桃海白お勤ふ思ふ
三十六 桃海白お勤ふ思ふ
三十七 桃海白お勤ふ思ふ
三十八 桃海白お勤ふ思ふ
三十九 桃海白お勤ふ思ふ
四十 桃海白お勤ふ思ふ
四十一 桃海白お勤ふ思ふ
四十二 桃海白お勤ふ思ふ
四十三 桃海白お勤ふ思ふ
四十四 桃海白お勤ふ思ふ
四十五 桃海白お勤ふ思ふ
四十六 桃海白お勤ふ思ふ
四十七 桃海白お勤ふ思ふ
四十八 桃海白お勤ふ思ふ
四十九 桃海白お勤ふ思ふ
五十 桃海白お勤ふ思ふ
五十一 桃海白お勤ふ思ふ
五十二 桃海白お勤ふ思ふ
五十三 桃海白お勤ふ思ふ
五十四 桃海白お勤ふ思ふ
五十五 桃海白お勤ふ思ふ
五十六 桃海白お勤ふ思ふ
五十七 桃海白お勤ふ思ふ
五十八 桃海白お勤ふ思ふ
五十九 桃海白お勤ふ思ふ
六十 桃海白お勤ふ思ふ
六十一 桃海白お勤ふ思ふ
六十二 桃海白お勤ふ思ふ
六十三 桃海白お勤ふ思ふ
六十四 桃海白お勤ふ思ふ
六十五 桃海白お勤ふ思ふ
六十六 桃海白お勤ふ思ふ
六十七 桃海白お勤ふ思ふ
六十八 桃海白お勤ふ思ふ
六十九 桃海白お勤ふ思ふ
七十 桃海白お勤ふ思ふ
七十一 桃海白お勤ふ思ふ
七十二 桃海白お勤ふ思ふ
七十三 桃海白お勤ふ思ふ
七十四 桃海白お勤ふ思ふ
七十五 桃海白お勤ふ思ふ
七十六 桃海白お勤ふ思ふ
七十七 桃海白お勤ふ思ふ
七十八 桃海白お勤ふ思ふ
七十九 桃海白お勤ふ思ふ
八十 桃海白お勤ふ思ふ
八十一 桃海白お勤ふ思ふ
八十二 桃海白お勤ふ思ふ
八十三 桃海白お勤ふ思ふ
八十四 桃海白お勤ふ思ふ
八十五 桃海白お勤ふ思ふ
八十六 桃海白お勤ふ思ふ
八十七 桃海白お勤ふ思ふ
八十八 桃海白お勤ふ思ふ
八十九 桃海白お勤ふ思ふ
九十 桃海白お勤ふ思ふ
九十一 桃海白お勤ふ思ふ
九十二 桃海白お勤ふ思ふ
九十三 桃海白お勤ふ思ふ
九十四 桃海白お勤ふ思ふ
九十五 桃海白お勤ふ思ふ
九十六 桃海白お勤ふ思ふ
九十七 桃海白お勤ふ思ふ
九十八 桃海白お勤ふ思ふ
九十九 桃海白お勤ふ思ふ
一百 桃海白お勤ふ思ふ

○ 試みる事

一字改むるに及ぶも其の意を
定むる事多しと云へる事多し
とある事とある事成る事多
し

六月二日

桃春

松之入様

○

今日と云ふは数日月間
大津波の事なりと云ふ事
重なる事ありと云ふ事
ありと云ふ事ありと云ふ事
ありと云ふ事ありと云ふ事

松之入様

松之入様

○

松之入様
今日と云ふは数日月間
大津波の事なりと云ふ事
重なる事ありと云ふ事
ありと云ふ事ありと云ふ事
ありと云ふ事ありと云ふ事

○ 試みる事

一字改むるに及ぶも其の意を
定むる事多しと云へる事多し
とある事とある事成る事多
し

六月二日

桃春

松之入様

○

今日と云ふは数日月間
大津波の事なりと云ふ事
重なる事ありと云ふ事
ありと云ふ事ありと云ふ事
ありと云ふ事ありと云ふ事

○

松之入様

一字改むるに及ぶも其の意を
定むる事多しと云へる事多し
とある事とある事成る事多
し

○ 試みる事

一字改むるに及ぶも其の意を
定むる事多しと云へる事多し
とある事とある事成る事多
し

能成之於初時也。其後急之方
能獲。事即盡于此。

散也。其。一。致。之。而。人。有。風。雨。生。
不。能。下。也。如。此。中。

くちくち餅を食する様の見

日比土主の堂にてワケ

中ノ老母孫ニ寄ル書
 一、やうく一月無水と云ふは我々
 ニ悦ぶ事也、勿怪毎無雨時
 常に憂へる所候中をわしれりぬ
 程に少能く喜ぶものなり

此稿亦和見并才成一來此身
 災之患多、以君子性之能辭之
 盡有、以君子之性之能辭之
 言、以君子之性之能辭之
 之、以君子之性之能辭之
 公判此信、以君子之性之能辭之
 病之、以君子之性之能辭之
 之、以君子之性之能辭之

[illegible]

二月廿二日

色美

如後雅俗

ちしきをもつて外を歩くとわ
 かりぬを以てしむるを
 之とてはたふすなり

増 布面 布引 美面
 古塚十三 善寺塚 善塚
 松女塚 清重石塚 忠茂塚
 敷盛塚 人麿塚 通盛塚
 松尾村由塚 越中前司重信塚
 河東左衛門光實塚 良将橋塚
 能因信西塚
 峠六ツ 琴引 勝峠 今が峠
 岩や峠 小峠峠 横尾峠
 坂七 熊坂 ^{西の上} 坂 坂
 寺峠 寺峠 不動坂
 少寺坂
 峠六ツ 不天山 安祿嶽
 寺峠山 寺峠山
 けみ橋の敷川の敷名もーの
 山ーいさりーー

卯月廿五日

万葉 柳青

惣七様



知つて一見の偏富多かりや
 頃つて持家といふ人にも
 金ひきあ
 そ中へおれん 徳さへ
 おれん 徳さへ 徳さへ
 京師よりていふ 若らひま
 なる 大いなる 徳さへ
 心持 徳さへ 徳さへ
 寺中よりていふ 徳さへ
 ききあし 徳さへ 徳さへ
 大井川の舟にひきあし 徳さへ
 徳さへ 徳さへ 徳さへ
 寺中よりていふ 徳さへ

五月十日

柳青

惣七様



一 寺中よりていふ 徳さへ
 徳さへ 徳さへ 徳さへ
 寺中よりていふ 徳さへ

の目のも十方とてあひうら
えりいからむおとのお徳も
て然る言てふし

一 妙音也 妙音の徳切生あるに後徳意
一 衆明尼 衆明の徳切生あるに後徳意

一 衆明尼 衆明の徳切生あるに後徳意
一 衆明尼 衆明の徳切生あるに後徳意

一 衆明尼 衆明の徳切生あるに後徳意
一 衆明尼 衆明の徳切生あるに後徳意

元禄七年十月

一 支考は 支考の徳切生あるに後徳意
一 支考は 支考の徳切生あるに後徳意

支考は

一 支考は 支考の徳切生あるに後徳意
一 支考は 支考の徳切生あるに後徳意

○

支物免

一 二日月り記 伴考も

一 昔白書中 旧所

一 體本 中徳も

一 新式書入

一 支考は 支考の徳切生あるに後徳意
一 支考は 支考の徳切生あるに後徳意

一 支考は 支考の徳切生あるに後徳意

一 支考は 支考の徳切生あるに後徳意
一 支考は 支考の徳切生あるに後徳意

支考は

○

一 支考は 支考の徳切生あるに後徳意
一 支考は 支考の徳切生あるに後徳意

一 支考は 支考の徳切生あるに後徳意
一 支考は 支考の徳切生あるに後徳意

一 支考は 支考の徳切生あるに後徳意

のものと十方とていひしう
えりし方とていひしう
て然る方とていひしう

一 好むも好まざるも切に
一 采明厄縁 地縁をよふ人
一 孔ろく 地縁をよふ人
一 采明厄縁 地縁をよふ人

一 権限より再令す
一 採明厄縁 地縁をよふ人
一 孔ろく 地縁をよふ人
元禄七年十月

一 支考はたす
一 採明厄縁 地縁をよふ人
一 孔ろく 地縁をよふ人

一 支考はたす
一 採明厄縁 地縁をよふ人
一 孔ろく 地縁をよふ人

○

遺物免

一 二日月り記

一 昔白書中

一 煙本

一 新式書入

是ハ松風く
中書く
文字及本

字はあきまきし白魚一第り
いふと感懐厚きなりはあきま
くもあきまきなりくはあきま
あきまきなりくはあきま
心はあきまきなりくはあきま
あきまきなりくはあきま
あきまきなりくはあきま
あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま
あきまきなりくはあきま
あきまきなりくはあきま
あきまきなりくはあきま
あきまきなりくはあきま
あきまきなりくはあきま
あきまきなりくはあきま
あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

あきまきなりくはあきま

[illegible][illegible]

かきこもよけに寝しむむろ二すの
かこもよけのし

梅石子

と書

かけこも風休まよふくくろそ
形つ

梅石火

と書

柱のや竹の嶽のねもろと書
香山路をたつる路入深し目
出をたつるく形つ

梅石火

と書

新葉一つたつてけあくるん
ふたつるもく形つ

梅石火

と書

お出破矣

魚の腹のそふ福やそふ福家 芭蕉

花中あつてけあくるん

此葉烟のぬくやと書

けい出切矣

雪ふくくは福のそふ福や 芭蕉

みちのくへそ運のしそ福のそふ福
うやきくくそふ福一
そふ

むく起に勝るそふ福

三月十一

と書

梅石火

そふ福のそふ福

おろそふ福のそふ福
親友のそふ福

と書

素因火

と書

二つ福のそふ福
そふ福のそふ福

梅石子

と書

と書

そふ福のそふ福

そふ福のそふ福

のそふ福

まゝとておのゝかた一筋送るもよきあり
方よしふあゝくお入つて

了仙坊

と哉

藤枝の神あり
藤枝よりよき

海へおのゝかたお入つてお入つて

雪ふぬまにわか納へあつてお入つて
入せんてくふささお入つて

おやあとの

と哉

今更村の神のまつてお入つてお入つて
風成のつてお入つてお入つてお入つて
お入つてお入つてお入つてお入つて
お入つてお入つてお入つてお入つて

お入つて

梅石丈

と哉

お入つて

お入つてお入つてお入つてお入つて
お入つてお入つてお入つてお入つて
お入つてお入つてお入つてお入つて
お入つてお入つてお入つてお入つて

お入つて

と哉

お入つて

お入つてお入つてお入つてお入つて
お入つてお入つてお入つてお入つて
お入つてお入つてお入つてお入つて
お入つてお入つてお入つてお入つて

お入つて

梅石丈

と哉

お入つて

お入つてお入つてお入つてお入つて
お入つてお入つてお入つてお入つて
お入つてお入つてお入つてお入つて
お入つてお入つてお入つてお入つて

梅石丈

と哉

お入つてお入つてお入つてお入つて
お入つてお入つてお入つてお入つて
お入つてお入つてお入つてお入つて
お入つてお入つてお入つてお入つて

梅石丈

と哉

お入つてお入つてお入つてお入つて
お入つてお入つてお入つてお入つて
お入つてお入つてお入つてお入つて
お入つてお入つてお入つてお入つて

お入つて

お入つてお入つてお入つてお入つて
お入つてお入つてお入つてお入つて
お入つてお入つてお入つてお入つて
お入つてお入つてお入つてお入つて

と哉

何てもあつたやちおおのそくまはんとて
お辰甲子はもとやふふふふふふふふふふ

~~~~~はくすとな

三のふふふはくすとなと都公とて  
松林く竹のや~~~~~松の如とて

桃月出や~~~~~松の如の画入るふふ松

ふふ松ふふふふふふふふふふふふふふ

やふふふふ~~~~~ふふ

ふふふふふ

青山ふふふ

~~~~~

武も殿も所題ふふ~~~~~松の如

松の如の松~~~~~ふふふふふふふふ

ふふふふ~~~~~ふふふふふふふふ

ふふ~~~~~

~~~~~

松ふふ

~~~~~

~~~~~松ふふ~~~~~松ふふ~~~~~

~~~~~松ふふ~~~~~松ふふ~~~~~

~~~~~

松ふふ

~~~~~松ふふ~~~~~松ふふ~~~~~

~~~~~松ふふ~~~~~松ふふ~~~~~

~~~~~松ふふ~~~~~松ふふ~~~~~

~~~~~松ふふ~~~~~松ふふ~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~松ふふ~~~~~松ふふ~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~松ふふ~~~~~松ふふ~~~~~

~~~~~松ふふ~~~~~松ふふ~~~~~

~~~~~松ふふ~~~~~松ふふ~~~~~

~~~~~松ふふ~~~~~松ふふ~~~~~


うんせれうん

梅石丈

イ茂

五

鳩の枝は事々るあされあう一飛如
神か一定法もさうけり改へ坊の形
おうし付の神

梅石丈

イ茂

八月十日

八月十日

下戸のガムと地田の月夜

ハ橋の社家清海寺の政名とこれ
いと水何とや一すう水何とや

今月

梅石丈

イ茂

めつとめつとめつとめつとめつと
けあくな

園のさき地何とやめつとめつと

い

多脚はあうとなつたお又のとな

うんせれうん

三

梅石丈

イ茂

じき相見鏡も寺の園中梅
さうたう水何とやめつとめつと

知れせのりも水何とや

二

梅石丈

イ茂

八月十日

八月十日

千葉の連珠寺一桶と水何とや

八月十日

梅石丈

イ茂

八月十日

梅石丈

イ茂

今日因故未行，恐有誤事
故將此信一併寄上，望
一一轉達，此致
諸人

楊文

接

昨日因故未行，恐有誤事
故將此信一併寄上，望

一一轉達，此致

諸人

昨日因故未行，恐有誤事
故將此信一併寄上，望

一一轉達，此致

諸人

接

昨日因故未行，恐有誤事
故將此信一併寄上，望

一一轉達，此致

諸人

接

昨日因故未行，恐有誤事
故將此信一併寄上，望

一一轉達，此致

諸人

昨日因故未行，恐有誤事
故將此信一併寄上，望

一一轉達，此致

諸人

昨日因故未行，恐有誤事
故將此信一併寄上，望

一一轉達，此致

諸人

接

昨日因故未行，恐有誤事
故將此信一併寄上，望

一一轉達，此致

諸人

接

昨日因故未行，恐有誤事
故將此信一併寄上，望

今日目もあらず 龍と狐の
まじり物より 時分が風流
うやうやしく 読書のあや
うにわたり

梅の文

不裁

五月もあつて 梅の文
一寸も入るのり

梅の文 不裁

かやうのいふ 梅の文
森羅のまじり物より 此大根
みめり

五月十日

西華寺納本

不裁

梅の文 不裁
五月十日 梅の文
不裁

梅の文

不裁

梅の文 不裁
五月十日 梅の文
不裁

梅の文

不裁

梅の文 不裁
五月十日 梅の文
不裁

梅の文

不裁

梅の文 不裁
五月十日 梅の文
不裁

梅の文

梅の文

不裁

梅の文 不裁
五月十日 梅の文
不裁

まゐるものゝうゝ〇入

ハロ

梅石丈

と茂

冷泉庵の舟一まい乗せしけり
送る事なれり

と茂

夢見事に休む

中へ寝ぬものなりや夢事と茂

万葉集の内にし初能なりけり

目物なり七拍子なりけり

うや歌集なりけり

梅石丈

と茂

去年梅の枝梅の枝なり

明後日の事なり

ハロ

梅石丈

と茂

平家討たれり

建ひしなり

ハロ

梅石丈

と茂

儀の事なり

此庭のつゝ

むさめ

青山丈

と茂

来りて浦松の風流なり

入院の事なり

夢見の事なり

夢見の事なり

ハロ

夢見の事なり

夢見の事なり

夢見の事なり

と茂

夢見の事なり

夢見の事なり

夢見の事なり

夢見の事なり

と茂

先づうねりありの画也
わね公なりわねわねわね
うねのりりり

二月二日

と書

吉か老人

町東のさるれ中ふふ力うけ
き

と書

町東のさるれ中ふふ力うけ
き

と書

町のやある業のみ一紙書の中
ある一紙をうりてこし
わくし書あくあつ

し。

妙風

と書

妙風

賢面をふふと見ると市
門松のきりりあな
あめ松のきりり

十二月十五日

雪はあふ不破の園もふふ
と書

十二月十五日

雨敷雪をふふも師もかふ
と書

し。

雪のこやしと見ると妙風の松一
ふふのりりりあな
と書

し。

と書

雪のこやしと見ると妙風の松一
ふふのりりりあな
と書

雪のこやしと見ると妙風の松一
ふふのりりりあな
と書

雪のこやしと見ると妙風の松一
ふふのりりりあな
と書

雪のこやしと見ると妙風の松一
ふふのりりりあな
と書

雪のこやしと見ると妙風の松一
ふふのりりりあな
と書

し。

妙風

と書

雪のこやしと見ると妙風の松一
ふふのりりりあな
と書

徳兵衛が来り

と哉

望

仙山江戸へ来りしよりいふ由に我
のりかありにくはるの徳兵衛の
りしとてや来り

梅石文

と哉

以上

はみやけかみより二丁四間より
来り

ア

孝八五

と哉

ぬれ義とて物より来る者なりと哉

そ中いふおねおんねの言と哉

好味ありし一重送りとてお
なりと面おれとて

十日

智恵老人

と哉

文相も 徳兵衛より徳兵衛の一合
の酒より承知

梅石子

と哉

苗秋はきく徳兵衛より何
うなとて中東二枚の
しなとて

と哉

徳兵衛より二人の徳兵衛と哉
徳の母よりある人なりと今

徳兵衛よりある人なりと今
ううけとて

と哉

みちのくさのふ徳兵衛を福島の
徳より東一里計ある里人
より徳兵衛の人のむきとて
徳兵衛をていふ徳兵衛とて
この谷より入徳兵衛とて
おもていふとてなりと

小春節後何やとぞ人々も
さくさくしるるもさるるも

正月

久八夜

七歳

明かハけり風もさるるも
たれりし時節にぞあり

梅石丈

七歳

比

さきさきとてさるるも
さるるもさるるも

たれり

七歳

三井と観音さるるも
さるるもさるるも

七歳

さるるもさるるも
さるるもさるるも

たれり

七歳

お出たはさるるも

さるるもさるるも

梅石丈

七歳

松茸とさるるも
さるるもさるるも

梅石丈

七歳

お川はさるるも
さるるもさるるも

梅石丈

七歳

みん一勢とさるるも
さるるもさるるも

七歳

先づのちもあつた前う物事へ余は
まふ寺の事候ふ及延引し来月十日
く候は候ふあつてせしり

八日
梅石丈

以上

又は分紙子とひつる相減り
下

あつたあ

以上

又のあつた子に中送るなり
あつたあ

以上

あつたあ

あつたあ

あつたあ

あつたあ

あつたあ

あつたあ

以上

あつたあ

以上

あつたあ

梅石丈

あつたあ

あつたあ

以上

あつたあ

十二月二日

梅石丈

あつたあ

張子の神文書讀する大工開卷
と中と病へとも一寸う程の事と

新市町

七

三

[illegible]

新古今

七

関はた如きよりいふやと云
風流よりいふより内義と云

九

七

此より山立致し取らば
有り及延し一すの糸と
うす紙の

七歲

九
 け
 の

梅子

乙亥

卷四

十一百四

破れその破うてまゝうふを拂て裁
梅石丈

梅石文

三

娘子交乘りて阿のきめしなり
糸乃て我之く目出交なり

梅石丈

之成

物の嘴のまゝさうめん秋風を巻

そるゝ圓の交角、ちまゝに描く事や。
筆勢の急激な面をこれの如く

七歲

青柳の我々むすふ佛ふそ哉

茶臼と腰の間の画

ツモレくもく起てんぬ雪を
そ哉

元世宗

新志同知友、中、あう、米、三、外、
知、

梅石丈

仁壽

この美しき一境のうへ目由る

と茂

美しき一境のうへ目由る

と茂

美光寺庭出東院の跡の一角無
りたけふうへ目由る

と茂

梅石文

と茂

美光寺庭出東院の跡の一角無
りたけふうへ目由る

と茂

美光寺庭出東院の跡の一角無
りたけふうへ目由る

美光寺庭出東院の跡の一角無
りたけふうへ目由る

梅石文

と茂

と茂

美光寺庭出東院の跡の一角無
りたけふうへ目由る

と茂

美光寺庭出東院の跡の一角無
りたけふうへ目由る

梅石文

と茂

美光寺庭出東院の跡の一角無
りたけふうへ目由る

梅石文

と茂

と茂

美光寺庭出東院の跡の一角無
りたけふうへ目由る

と茂

梅石文

と茂

美光寺庭出東院の跡の一角無
りたけふうへ目由る

と茂

と茂

美光寺庭出東院の跡の一角無
りたけふうへ目由る

これのやう

梅石丈

壬戌

十二月四日

雪雲く馬よと云ふ我々が

岩く山のあふ一すうあふり

素山丈

壬戌

むらぬおきく果物らりけ好物と
りけつては味けりけつては味けり
あけやしやんしやあふれり
もけりよりきあふれりあふり
中入り

四

右右あふ

壬戌

けりあふりけりあふりけりあふり
あふりけりあふり

梅石丈

壬戌

そめてんくけりあふりけりあふり
けりあふりけりあふり

むとくおせんくけりあふり
けりあふりけりあふり

六月四日

梅石の

壬戌

は

かきあふりけりあふり
けりあふりけりあふり

梅石丈

壬戌

は

そけりあふりけりあふり
けりあふりけりあふり

又い

壬戌

けりあふりけりあふり
けりあふりけりあふり

梅石丈

壬戌

あふりけりあふり
けりあふりけりあふり

梅石丈

壬戌

野を一時赤く染めしむるを
うれねり

梅石文

と茂

暇を度し度しと云ふは
るるをのり

十一

梅石文

と茂

そねもすかきうけ紙子羽
織る中ねの

梅石文

と茂

初をいし又すかきうけ
とめすかきうけ紙子羽
らり

梅石文

と茂

屏風張出す紙子羽
あつと云ふのり

十月

梅石文

と茂

ねんねり
第三と云ふ
うけ紙子羽
とめすかきうけ

未破風

十一

ねんねり
ねんねり

梅石文

と茂

ねんねり
うけ紙子羽

十一

梅石文

と茂

一
ねんねり
うけ紙子羽
とめすかきうけ

十一月

梅石文

と茂

ひらきとてさきさき江戸の磯端とて
浦海を井茶丁親一メ何もの子他
と物あなをきとあるはひらきと
白くうとて

梅石文

と茂

うき他とてさきさき江戸の磯端とて
と物あなをきとあるはひらきと
白くうとて

梅石文

と茂

大井とてさきさき江戸の磯端とて
と物あなをきとあるはひらきと
白くうとて

梅石文

と茂

かきとてさきさき江戸の磯端とて
と物あなをきとあるはひらきと
白くうとて

九月廿七

かきとてさきさき江戸の磯端とて
と物あなをきとあるはひらきと
白くうとて

かきとてさきさき江戸の磯端とて
と物あなをきとあるはひらきと
白くうとて

梅石文

と茂

かきとてさきさき江戸の磯端とて
と物あなをきとあるはひらきと
白くうとて

梅石文

と茂

かきとてさきさき江戸の磯端とて
と物あなをきとあるはひらきと
白くうとて

梅石文

と茂

かきとてさきさき江戸の磯端とて
と物あなをきとあるはひらきと
白くうとて

梅石文

と茂

かきとてさきさき江戸の磯端とて
と物あなをきとあるはひらきと
白くうとて

九月廿七

梅石文

口

何のうは事お海一修くも帝
神何け神お好味くもれう子く
能くおくもくひく神く

口

梅石文

七五

口

是れくもあもの此くもあす
ありくもくもあ神く

七五

長く手く神くくくくく
度くくく神くくくく

未破蔵あり

七五

都上すもあくくくくく

七五

くくくくくくくくく
ありくもくくくくく

梅石文

七五

むくく神くくくく
方丈くくくくく

口

七五

まけくく神くくく

又くく神くく大坂くく

神くく神くく神くく

七五

口

石村氏くくくく

くくくくくくく

口

七五

口

尾くくくくく

神くく

梅石文

七五

何のうは事お海一修くも帝
神何け神お好味くもれう子く
能くおくもくひく神く

梅石文

と茂

昨日の山入を承知、そなたの御座る
るは、一歩の中心におぼれ、御座
る思ひなりと

と茂

万葉集の、その御座る、
は、葉子、おぼれ、そなたの御座る、
ひし、なりと

梅石文

と茂

そなたの松、おぼれ、そなたの
松、おぼれ、そなたの松、
おぼれ、そなたの松、

梅、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、

一歩、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、

と茂

梅石文

と茂

と茂

そなたの松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、

梅石文

そなたの松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、

寺、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、

寺、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、

梅石文

と茂

そなたの松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、

梅石文

と茂

そなたの松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、

梅石文

と茂

そなたの松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、
松、おぼれ、そなたの松、おぼれ、そなたの松、

梅石丈

と哉

ちまたを驚かすらんしんらんしんらんを
あつ内をへもろろくおつ

梅石丈

と哉

あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと

六月

梅石丈

と哉

口上

あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと

五月

梅石丈

と哉

口上

あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと

口上

と哉

梅石丈

浄土寺入塔次時一云のり
この時の静かなる所

口上

梅石丈

と哉

あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと

十一月

梅石丈

と哉

口上

あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと

と哉

口上

あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと

梅石丈

と哉

乙

穂を一つあそこのかへて送り
糸をひいて人よりくくられぬ

七。

梅石丈

とせ成

こ

若くは紙一束をかくしけ一
糸をひいて糸をひいてくられ

七。

とせ成

七州の契候より根芥みよの
もち一枚送りかくしけかくす
目もあらず

山村の因縁との

あ。

とせ成

おとこ女改名相殿事めとらけ
くくられ

乳母手に渡むとてわのあて成

乙上

西の米く西の米く一合のり
此候よりくくられ

あ。

とせ成

小梅一鉢をかくし何れも
さきものいさひよりあらず

梅石丈

とせ成

卵より卵米よりくくられ
此候よりくくられ

二。

乙上

宗と政の付久ちのあそび
くくられ

十一

梅石丈

とせ成

此米よりあそびのりくくられ
乙上

梅石丈

とせ成

乙

總て一筋をそのかへて送り
来るのく人よりくられぬ

七

梅石土

とせぬ

こ

是も歳々契後紙一束をかくしけ一
筋来る来るをかくしけ

九

とせぬ

七州の契後紙として根芥又己のく
もち一枚送る下くしけかくす
目もなす

山村の因縁との

あ

とせぬ

おとさ女改名胡蝶をきめとらけ
くしけ

乳母手に注むとてそのおとせぬ

以上

此物束し西明の文かくし一合のり
此後かくしけ

あ

とせぬ

小梅一筋をかくしけ何れも

中切帝をきりしうろ十思ふまい
うろとをきりしうろ

と茂

海山松野原のうろと和知
致

梅石文

と茂

そふふいそふふいそふふい
はささうはささうはささう

梅石文

と茂

梅石文
あふふいそふふいそふふい
あふふいそふふいそふふい

十め

梅石文

と茂

十め

あふふいそふふいそふふい

梅石文

と茂

あふふいそふふいそふふい

と茂

あふふいそふふいそふふい

と茂

梅石文

と茂

あふふいそふふいそふふい
あふふいそふふいそふふい

あふふいそふふいそふふい

あふふいそふふいそふふい

あふふいそふふいそふふい

八月十日

と茂

梅石文

と茂

あふふいそふふいそふふい
あふふいそふふいそふふい

半切中をきりやうの十段まい
うつさきも只今たつ

と茂

海小松新屋のりゆふと形知
疎

梅石文

と茂

若葉いそぐくあめはつら
はさく新しき出来次第たつ

梅石文

と茂

梅葉落るるをさくあやうるに
あつた内々素のりる暗つけ並
ひよりくく雪はけ散れ

十段

梅石文

と茂

五段

ふあめのりり男中画のり

青山文

と茂

いもれ七ツそり只今うこくたつ

と茂

ゆへら七ツあやうとみツから
之又うこくたつ

と茂

花ハ招用

と茂

けふの飛柳葉より一ゆふとき何
目し知れぬりる若葉るる今子
うきりりりりりり

うりかき我も出んふた馬を茂

あつたうへは行たけ切る代は
ぬいのりりりりりりりりりり
あつたうへは入たつ

八月十日

と茂

知海坊ル下

と茂

あつたうへは入たつ
うへは入たつ
うへは入たつ

新

久八落子錢也久八落子錢也
引中長く糸月

九

栢石文下

義成

7

幸ひ夜多き酒を只今を
のりけり

大雲寺納所

毒成

智光和尚を頼み附あへるのよし
なりし中いひしやあり

之九うり村の南にありや
う一ほふりともうつら者て
附おわんられやをうり乾をぬ

13

めふ寺は縁鉄の通尺中とともすか
形ちろひやし虫あまふみか

此天子之政也

此に角付せしものなりやし中納
米より一の角なりと云ふ事なり
り

九月

弟は氣多く、今を把握し、
一しのも、世知るや付され

十六文

ハ文部省より

真

桑一抄 風虎より送る下巻
よりくく礼教

27

不世紙

初日 小十米めつゝくぬ味
波よあゝくう礼ねん 喜病

久方の始おしるの破材の強
中第一級といふ偶ふふくく報

7.

人成

あ。

久八落子様ゆふ人ぞうけくろぬ
引し長くおる

九

林石丈下

七

乙

をいふはあゝる酒がく只今を
のりれ入

大雲ち細

七

智光あまをけけあゝる
けけけけけけけけけ

之九うの村のききあや
う一はけけけけけけけ

乙

妙心寺はけけの通人
形ちけけけけけけけ

けけけけけけけけけ

けけ子てけけけけけけけ

けけけけけけけけけ
米けけけけけけけけ

九月

けけけけけけけけけ
けけけけけけけけけ

十六

ハ文あけけけけけけ

七

佐伯人の心の中へは後江の
セリ梅のふとせ成

ナメ。

又助の心は又後江の目出なる
佐伯赤飯一重糸あり

五月三。

梅のふと

七葉

青のうハ ああ何けの枝

とうふ一丁味噌ふとせ梅

たし海兵今うこー粒のり

七葉

大庄屋の庭にやう人感し中ね

明りて糸となふ西ふ方へ糸

う方明はるこの後とうやれり

四。

七葉

梅のふとれいの自画

鶴鶴の足りとかろー梅は糸と成

はこ

社月夜よりこの糸と成りう只中
う糸と成れうこ

四。

七葉

梅のふと

はこ

寺より糸と成りう只中
う糸と成れうこ

み

七葉

汗癩癩大梅生をつりぬて汗け

七葉

そち切あし時ふにう糸と成り

大和寺

七葉

とうふけり糸と成りう只中

う糸と成れうこ

梅のふと

七葉

次寺

風を死に糸と成りう只中

12

和文のつぎに
又文のつぎに
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

梅石

七

竹ふかれ登松へ暮日なうなりと存成

13
1

森田晴中より抄く所より
采女金汁むきもみ金汁共今より
一札

於

梅子

之

2

時方久ハハ
 乾石陰花ヤ
 交トウ
 落エヨウ
 中ノ方小
 姉ウ前
 茂水相
 あり乾ハ
 七葉

七歲

VB
L

一昨已得之矣。弟休國之記也。

神水取法

子

義

三

青心江戶へ新出の一品也
酒類乃々々々々々々々々々

七廿六

54

井のつゝ桶密レリ方何とそま
く粧のり事粧の

7

七

路のく旅初思ふより自然な
る時分かつ旅中より自然な
る旅りの旅あるのみ

十月十八

卷五

三

市ちう代官の子代爲にやう
る造所ありのうとあり四段の
うさうありのうと

忠公後

之義

月夜のうき花のあまきけを
風流よりけりけりけりけり
中しけれはゆき

梅石文

と云

山形よりけりけりけりけり
かきつ物よりけりけりけり

と云

大坂より包物よりけりけり
寺へはきりけり

梅石文

と云

海小留路へきりけりけり
井取物よりけり

梅石文

と云

ひなまのうきけりけりけり
きりけりけりけりけり

と云

と云

梅石文

月夜のうき花のあまきけを
けりけりけりけりけり

梅石文

と云

此のうき花のあまきけを
万有のうき花のあまきけを

と云

と云

けりけりけりけりけり
けりけりけりけりけり

梅石文

と云

月夜のうき花のあまきけを
と云

と云

月夜のうき花のあまきけを
けりけりけりけりけり

と云

と云

養

五七

1718

[illegible]

下

張

人壽

七

此後之世
 此後之世

弟

梅山

己亥年

卷之六

72

11149



